慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 「第一次共産党」に関する聞き取り稿本 |
| Sub Title | Four oral evidences on the communist movement in prewar Japan |
| Author | 寺出, 道雄(Terade, Michio) |
| Publisher | 慶應義塾経済学会 |
| Publication year | 2010 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.103, No.1 (2010. 4) ,p.187- 205 |
| JaLC DOI | 10.14991/001.20100401-0187 |
| Abstract | |
| Notes | 資料 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20100401-0187 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」103 巻 1 号（2010 年 4 月）

資　料

# 「第一次共産党」に関する聞き取り稿本

寺　出　道　雄

## （一）はじめに

以下で紹介する史料は，慶應義塾の所蔵する現代史史料「水野資料」の一部である。

ここでは，その「水野資料」の具体的な紹介の手始めとして，第一次共産党――異説はあるが，通説では 1922 年に結成，1924 年に解党――の結成に参加した人々からの聞き取り記録を採録する。第一次共産党は，日本において，狭義の共産主義的な政治・思想運動のみでなく，マルクス主義的な政治・思想運動の全体の源流となった組織であった。

なお，採録する史料の記録者についての推定は以下で述べるが，確定はしがたい。史料は，最終的には著作者不明の文書であると考えて，ここに採録し紹介する。

## （二）史料について

### 1　史料の外観

史料は，いずれもわら半紙製の B5 判 200 字詰め縦書きの原稿用紙に，インクを用いて手書きで記載されている。その筆跡は概ね明瞭であるが，一部判読に苦しむところもある。

用紙は，原稿用紙とはいっても既成のものではなく，その裏面――本来の表面――には，「日本共産党中央委員会」「日本共産党書記局」といった発行主体が明記されたものを含む，「指令」等の文書が謄写版印刷されている。それらの文書の日付等の状況からすれば，ここに採録する史料を含む文書は，戦後の共産党本部で，B4 判のわら半紙に印刷された文書の余分となったものを半裁し，本来の裏面に原稿用紙の「枠」を謄写版で印刷し直して，記載されたのであると推定できる。

関連文書は，採録する 4 編を含んで全部で

9編であり，それらを纏めて厚手の紙の表紙をつけ，『日本共産党創立のころ』と総題して仮綴じされている。それら9編は，戦前の共産党の活動に関する聞き取り記録の他には，戦後に出版された戦前の共産党史に関する著作への批判文の原稿である。

採録する4篇以外の残りの5篇のタイトルは，一々明記しない。しかし，その中に酒井定吉と署名された「『コミンテルンの密使』か挑発者か」と題された，採録する史料と同一の筆跡である文書が含まれていることは，その聞き取りの聞き手と記録者を推定することに役立つ。なお，『コミンテルンの密使』とは，以下の史料にもその人名が頻繁に登場する近藤栄蔵の回想記であり，1949年に出版された。したがって，史料の『日本共産党創立のころ』としての仮綴じは，1949年以降におこなわれたことになる。

2　史料の話者と記録者

史料そのものから分るように，4篇の聞き取りは，1948年7月から9月までになされている。

その4篇の聞き取りの話者は，前述のように，いずれも第一次共産党の結成に加わった人々であり，その略歴は史料の掲載順に，以下の通りである。(*) なお，その掲載順は，史料そのものから判明する聞き取りがおこなわれた日付順であり，仮綴じにおける綴じ順ではない。

橋浦時雄（1891－1969）

鳥取県に生れる。早稲田大学在学中に大逆事件にからみ入獄。出獄後，売文社，暁民会，日本社会主義同盟に参加。共産党結成に参加。第一次共産党事件で検挙。第一次共産党解党後は労農派の立場に立つ。人民戦線事件で検挙。戦後は，消費組合・生活協同組合運動に携わる。

浦田武雄（1893－1973）

熊本県に生れる。日本大学専門部を中退し，暁民会に参加。暁民共産党事件で検挙。共産党結成に参加。第一次共産党事件で検挙。再建後の共産党には加わらず，社会運動通信社勤務等を経る。戦後は共産党に再入党したが，五〇年問題で離党。

高瀬清（1901－1973）

岐阜県に生れる。暁民会への参加のため早稲田大学を放校。共産党結成に参加。第一次共産党事件で検挙。第一次共産党解党後は非共産党系の無産政党に所属し，役員を務める。戦後は著述に従事。

高津正道（1893－1974）

広島県に生れる。早稲田大学在学中に建設者同盟を組織。暁民会，日本社会主義同盟に参加。早稲田大学を放校。暁民共産党事件で

(*)　略歴は以下によっている。
犬丸義一『第一次共産党史の研究　増補　日本共産党の創立』青木書店，1993年。
近代日本社会運動史人物大事典編集委員会編『近代日本社会運動史人物大事典』(1)～(5)，日外アソシエーツ，1997年。
なお，後述する酒井定吉の略歴は後者に，同じく後述する史料に登場する第一次共産党の党員名の一覧のうち，既判明分の確定は前者に，この史料によって判明する分の生没年は後者に依拠している。

検挙。共産党結成に参加。第一次共産党事件直前にソヴィエトに一時亡命。帰国後禁錮。再建後の共産党には加わらず，労農派の立場に立つ。戦後は社会党の創立に加わり，同党所属の衆議院議員，衆議院副議長を務める。

以上から分るように，4人の話者は，第一次共産党の結成に先行したいくつかの政治・思想団体の内の1つである，暁民会系の人々であった。また，彼らの内，聞き取りの時点で共産党の党員であったのは，浦田1人であったことになる。

一方，聞き取りの聞き手とその文書としての記録者の氏名は，史料には明記されていない。しかし，それらは，史料2の浦田からの聞き取りで，話者浦田が聞き手に「君」と呼びかけており，史料の記録者が「君」の部分に「(酒井)」と注記していること，同じ綴じ込みに同一の筆跡である酒井定吉の前記の文書が含まれていることからすれば，酒井定吉（1893－1974）であるとも推定できる。

酒井は，1926年に再建された後の共産党の党員であった人であり，モスクワにあったクートベ（東洋各国共産党の幹部の養成学校）への留学経験をもつ。彼は，共産党の正規の組織の壊滅後におこなわれた，戦前における共産主義者の最後の組織的活動の1つにも加わった。また，彼は，戦後は共産党の党務に従事し，1972年には，同党の党史資料室責任者となっている。

1948年という，録音装置など普及していなかった聞き取りの時点から判断すれば，聞き手である酒井は，速記的なメモを取りながら話者の話を聞き，聞いた時点から遠くない時点で，それを自らここに収録した文書として記録したと推定することもできる。

この話者と記録者と推定することが可能な人物の略歴から，また史料の外観から，さらに推定すれば，採録する史料は，戦後，活動を再開した共産党が，党史の資料の作成をおこなうために，関係者からの聞き取りをしたことの産物であることになる。

### 3　史料の位置

第一次共産党の研究には，従来，戦前に治安当局によって押収された党文書や第一次共産党事件の被告に対する「予審尋問調書」「予審終結決定書」「判決文」等とともに，関係者の戦後における回想が用いられてきた。それらのなかでも，この史料の作成の後になされた話者4人の回想は，さまざまな事実の確認において重要な役割りを果たしてきた。(**) そうした史料の状況からすれば，以下の史料は，彼らがより後年に残した回想の原型をなす貴重な証言であるといえる。

もちろん，この史料での話者らの証言も，およそ証言というものがすべからくもつ限界にはふれないとしても，第一次共産党の時代から20年以上が経過している時点での証言で

(**)　それらの内で，従来，しばしば参照されたものは以下である。
高津正道・浦田武雄・高瀬清（座談会記録）「『暁民共産党』と第一次共産党」，以下に所収。同志社大学人文科学研究所編『近藤栄蔵自伝』ひえい書房，1970年。
高瀬清『日本共産党創立史話』青木書店，1978年。

あることからする限界をもっている。

例えば，第一回の党大会（「創立大会」）がおこなわれた場所についての証言1つをとってみても，それについて語っている橋浦（「幡ヶ谷火葬場付近の某旅館」），浦田（「麻布霞町付近の某君の宅」），高瀬（「渋谷の天現寺と恵比寿の中程を右に登った坂の上の或る産婆さんの二階」）の証言は食い違っている。話者らにとって，非合法の共産党の結成に加わるということは，生涯の重大事であったはずである。そうした重大事についても，20余年の歳月は記憶を風化させたのである。4つの証言では，さまざまな「事実」について，「藪の中」の状態が生れている。

また，単に記憶が生理的に風化したのみではない。時間の経過は，生理的な風化を超えて，記憶を加工してしまってもいるであろう。

しかし，時間の経過による風化と加工は，どんな記憶にもつきものである。逆にいえば，以下の証言は，1948年という戦後初期のものであり，それは戦後における風化と加工をまだ大きくはこうむっていないのである。

そうした史料の性格からすれば，ここに紹介する聞き取り記録に含まれている「事実」は，第一次共産党の研究において，従来，通説ないし異説の主張者によって「事実」として認定されてきた事柄に，なお再検討すべき点がさまざまにあることを示唆しているといえる。その点を含めこの史料の特に興味深い点を簡単に指摘すれば，以下の3点である。

①橋浦・浦田・高瀬の各証言は，日本共産党創立大会22年説を述べているが，21年に党創立に準ずる動きがあったことまでは否定していない。(***)

②橋浦・浦田・高瀬の各証言は，日本共産党のいわゆる「石神井臨時大会」における，天皇制問題を論議することの是非をめぐる緊迫した状況についての，簡単ではあるが，生々しい証言となっている。

③高瀬証言は，コミンテルン第四回大会の直後に開かれた「日本問題委員会」での，コミンテルン本部と日本共産党代表との間の議論（あるいは前者から後者への「指導」）についての，簡単ではあるが，生々しい証言

---

(***) 橋浦証言では，1921年末か22年初めに，党の「改造」のための「解党」が話題となったことが述べられている。とすれば，共産党は21年には創立されていなければならないはずである。しかし，その橋浦自身も，党創立大会22年説を述べている。また，高津証言では，21年に「党を組織したことにし」たと述べられている。しかし，同証言からは「組織したことにし」たのと「組織した」のとはどう違うのかは明らかでない。

この場合，浦田証言における「時」（「一九二十二年七月十五日頃」）と高瀬証言における「場所」（「渋谷の天現寺と恵比寿の中程を右に登った坂の上の或る産婆さんの二階」）とを合成すれば，共産党自身が主張するように，同党は1922年7月15日に「東京府豊玉郡渋谷町字伊達跡一八三七番地（現在の東京都渋谷区恵比寿三丁目三十五番）の一民家」（日本共産党中央委員会『日本共産党の七十年』（上）新日本出版社，1994年，35頁。）で創立されたということになる。しかし，上記『七十年』ではそうした認識の史料的根拠は明示されていないので，ここでは，浦田証言と高瀬証言とを安易に合成することはせず，日本共産党の創立の「時」と「場所」とは，未だ十分には確定されていないと考えておこう。

となっている。

しかし，それらの点の詳しい検討は，稿を改めておこなうこととし，ここでは史料の紹介のみをおこなうことにする。

4　史料中の人名

以下の史料では，多くの人名があげられている。それらの内，従来から，第一次共産党の党員であったことが確認されている人々の姓名の一覧を以下にしめしておく。それによって，史料に姓ないし略称のみで登場する人物の特定と，誤記されていると思われる人名の補正に代えることにする。(50音順。カッコ内は史料にある号ないし略称。)

ア行

青野季吉，赤松克麿，浅沼稲次郎，荒井邦之介，荒畑勝三（寒村），市川義雄（市義），稲村隆一，井之口政雄，猪俣津南雄，上田茂樹，浦田武雄

カ行

片山潜，金子健太，川合義虎，川内唯彦，川崎悦行，河田賢冶，北原龍雄，黒田寿男，小岩井浄，国領五一郎，国領巳三郎，近藤栄蔵（近栄）

サ行

堺利彦，佐々木隆太郎，佐野文夫（佐文），佐野学，志賀義雄，杉浦啓一，相馬一郎

タ行

高尾平兵衛，高瀬清，高津正道，高野武二，高野実，田所輝明，棚橋小虎，谷口善太郎，辻井民之助，徳田球一

ナ行

仲宗根源和，中村義明，鍋山貞親，西雅雄，野坂参三

ハ行

橋浦時雄，花岡潔，藤岡淳吉

マ行

森崎源吉

ヤ行

山川均，山崎一雄，山本懸蔵（山懸），吉川守圀

ワ行

渡辺政之輔（渡政），渡辺満三（渡満）

以上のような，第一次共産党の主要な党員をほぼ網羅する登場人物の豊富さは，以下の史料の最大の特徴である。

また，以下の史料によれば，第一次共産党の党員であったと推定できるが，これまでは党員であったことが確認されていない人物として，次の人々がある。(史料への登場順。)

西妙子（不詳），上田の細君（不詳），和田巌（1898－1923），田口憲吉（不詳），本沢兼次（生没年不明），谷口昿瞭（不詳），荘原達（1893－1977）

5　凡例

最後に，史料の採録にあたってとった技術的な手続きを，凡例的に10項目としてまとめておく。

1. 原文では，新仮名遣いと旧仮名遣いが混用されている。それはそのまま再現した。
2. 原文では，一部の漢字に旧字体や略字体が用いられている。それは通常の新字体に直した。
3. 原文では，促音の表記に小字と大字が混用されている。それは小字に統一した。

4. 原文では，読点として「、」が用いられている。それは「,」に変えた。
5. 原文において明らかな句読点の脱落があるときには，それを補正した。
6. 原文において記述の通し番号に番号の付け間違いがあるときには，それを補正した。
7. 原文において新聞・雑誌名，文書名にカッコが付いていないときには，それを補足した。逆に，組織名にカッコがついているときには，それを外した。
8. 原文では，しばしば削除，修正，挿入がおこなわれている。それは，原稿の作成過程での単純な技術的変更であると判断できる場合には，特に明記せずに，削除，修正，挿入の後の文章を記載した。単純な技術的変更ではないと判断される場合には，その状況を明記した。
9. 原文における人名や年号以外の語について，明らかな誤字，脱字を補正，追加したところがあり，また，仮名を漢字化したところがある。人名や年号の誤記と思われるものについては「ママ」とした。なお，原文では，「コミンテルン」の語が，「コミンテルン」と記載されるとともに，しばしばロシア（キリル）文字で略称されている。それは，「コミンテルン」と統一して表記した。
10. (・) 内は史料の記録者による補足であり，〔・〕内は紹介者による注記である。小さな（・）による脚注は紹介者によるものである。

## （三）史料

### 史料１　橋浦時雄からの聞き取り

橋浦時雄氏の党創立前後の時代の憶出口授[1]

一九四八，七，一一日

党創立の最初の話は一九二一年頃フランスから帰国した近江谷駒君が，私に社会主義史がほしいといふので書いてやったのが縁で彼から日本でも共産党を創ったらどうだと話がでた。それでそのことを堺，山川の両君に話したところ堺はカウツキーの党批判がぢきにでるからまてというた。山川は最初から熱心であった。荒畑はまだサンジカリズムを抜けきらなかった。

他方在米の日本人社会主義者団の吉原太郎から山川君のところへ連絡があったらしい。

そこで山川が中心になって党組織準備会のような組織をつくった。その時は堺，荒畑，高瀬，中曾根（ママ），浦田，橋浦，高津，近栄らが集まった。準備会には労働運動社から近藤憲治（ママ）や和田久太郎らも含めたが彼等はアナキズムが清算しきれず，いつとはなしに脱落した。

準備会は発展してグループになった。

吉原太郎といふのは米国帰りで警視庁の廊下などをうろつく冒険主義的な危険な男であった。この男がサガレン売却問題でヨッフェと交渉するからマンダートをくれと要求した。党は当時この要求を押へる力がなかったので荒畑を先回りさせてマンダートを与えたことがあった。

(1)　原文：200 字詰め原稿用紙 21 枚。

一九二一年の終りか一九二二年の初め頃この吉原太郎の排除の件で佐野君の家へ，吉川，堺，田所，稲村，満満，橋浦らが集まって，不良分子の排除のため党を改造するには一時解党するといふ話にまで進んだ。この話を川崎憲二郎に話したところ，それが高津に伝はり高津から逆にまた佐野君に話したので，高津は当時非常に評判が悪かったのでウヤムヤになってしまった。

近藤栄蔵は一九二〔1字空白〕年コミンテルン極東代表に用件のため上海に派遣された時，その出発前『日本労働新聞』に「脱出記」といふ記事を書いた。そのため帰国の際下関で官憲に捕まり，持っていた党資金を全部ウヤムヤにしてしまった。またその行動に不審の点があったので橋浦が若い同志達の意見を代表して近栄の不信任を問題とした。近栄は役員を辞任し，コミ代表は徳田君が代ることになった。

コミンテルンの日本代表が不馴れのため，堺の派遣が要求されたが，堺は暁民会系とみられ，片山が山川，徳田と結んで堺をモスクワに留置くためだというデマも出て結局徳田君が行くことになった。プロフィンテルンには荒畑が若い人達の間で呼声が高かったが，鉄工組合を代表して山懸が行くことになった。

党創立大会は一九二二年七月頃幡ヶ谷火葬場付近の某旅館で開かれた。出席者は山川，堺，荒畑，高津，徳田，橋浦らの主なグループの代表者であった。ここで「暫定党規」が決定し，日本共産党の党印もつくった。（代表派遣のため必要とした。）

「暫定党規」の細目については今記憶に残っていないが，コミンテルンの規約を範として書いたもので，第二回大会に修正された。

第一回大会当時のメンバーは水曜会から，山川，徳田，上田，田所，西，西妙子，上田の細君ら，ML会から堺，中曾根，藤岡，川内ら，暁民会から近藤，高津，高瀬，浦田，川崎，荒井，北郊自主会から橋浦，高野，満満，関西から荒畑，鍋山，中村，辻井，花島らその他佐野学，猪股，和田巌，佐文，吉川等であったと思ふ。

この時選出されたのは総務幹事山川，荒畑，高津の三名，会計幹事橋浦時雄，国際幹事堺，連絡係徳田等であった。

第二回大会当時高津が堺，山川を攻撃した。これは分派対立の表面化であった。その結果執行委員には今までの委員は堺一人を残して全部新しい分派的色彩のない人を選んだ。委員も十名に増員され，各々専門委員を分担した。

第二回大会では次のような諸問題が討議された。

(1) 党拡大にともなう機関の整備と組織問題。
(2) 党暫定規約の改正。
(3) 運動方針。これは労働組合の組織と左翼化が問題となった。

この頃党は労働組合の組織化を積極的にやるべきことの指令があった。プロフィンテルンの責任者としては荒畑氏が決定した。

当時党活動は研究会式のものは発達し活発に行はれたが，組織活動方面には手が伸びなかったのであった。山本懸蔵君などは「党はインテリ分子に占められて労働者分子は全くいない学者とインテリの党である」というてい

た。実際当時各グループの水曜会，暁民会，無産社等いずれもペロリストのグループであった。労働者党員としては創立当時は僅かに渡辺満蔵君が時計工から参加したのみで，その直後総同盟から山本懸蔵，田口憲吉，河田賢治君ら，時計工から高野武二，本沢兼次ら，機械工組合から杉浦啓一，金子健太，谷口昿暸ら，南葛労働会から河合義虎，渡辺政之助ら，大阪から鍋山，中村，花島君ら，京都から辻井，佐々木，国領兄弟，谷口君らが加盟した。

党活動は大衆的でなく，組織的な活動よりも陰謀的行動に流れていた。

創立前後からの党活動としては第四六議会に過激社会運動取締法案，労働争議調停法案，小作争議調停法案の三大悪法案が上程されようとしたので，党は各労働団体，思想団体を指導して全国的反対運動を起し遂にこの三大悪法案の議会提出を阻止することができた。この反対運動の過程に全国無産者同盟が生れた。

寺内反動内閣のシベリヤ出兵に反対して，対露非干渉同志会を各労働組合，思想団体を網羅して組織した。ここにはアナキズムの労働組合，思想団体も引入れることに成功した。対露非干渉同志会は，シベリヤ出兵即時撤兵，労農政府承認，対露通商即時開始，ロシア飢饉救済をスローガンとし全国各団体労働組合に呼かけて，これによって全国的組織と連絡をつけることができた。

次にロシア飢饉に際しては都下二十数団体の労働組合，文化団体を結集して全国的に義捐金品の募集をやり，相当数の金品を送ることができた。後震災の時ロシアからレーニン号が救援物資を満載してきたのは，この時のお礼とみるべきだろう。

党は労働戦線の統一に最大の努力をした。野坂君山懸君を中心として左翼的指導をしていた総同盟関東同盟会をして「戦線統一のためには解体も辞せない」と決意せしめたほどで，一九二二年九月三十日に大阪天王寺公会堂で労働組合総連合大会を開催するまでに運んだが，アナキスト側の自由連合論と鋭く対立して遂に決裂した。しかしこの大会によって党はアナルコ・サンジカリズムの勢力を徹底的に叩付けて労働組合の指導権を握ることができた。この大会は日本の労働組合運動に大きな意義を持つものである。

また新人会，文化同盟その他各大学や専門高校等の学生団体，研究会等を結集して学生連合会を二十二年十一月頃に組織し学生運動を統一し党の指導下におくことになった。

総同盟その他の労働組合内部の左翼分子を結集してレフトを組織し労働組合運動の指導を強化することに成功した。

その他，日本農民組合の創立，全国水平社等の創立には党の活動分子は積極的にこれに参加して，これを助け左翼の力を植へつけた。

二十二年の三月の石神井の臨時大会の時は二回大会の時よりも二倍位に党は拡大していたと思ふ。各細胞代も二倍位で三十余名出席した。

この臨時大会はコミンテルン派遣代表の選出と，綱領審議，合法政党問題等を決定するためであった。

コミンテルン代表は荒畑寒村君と決定した。彼はプロフィンテルンの信用があった。

綱領審議は佐野学や猪股君らが起草委員に

なっていてブハーリンの「綱領草案」を基礎にして新起草することになっていたのだが，起草委員の間で意見が一致せず，時間がなかったというて草案ができていなかったので，ブハーリンの「草案」を基礎として討論した。まず天皇制が問題となった。天皇制の廃止には皆異論はなかったが，当時はまだ大逆事件の記憶から醒めず，これを論議すれば直に弾圧をうけるだろうと考へていた。堺君は此処で論議することは危険だから，もし論議されるなら退場すると主張したので，ウヤムヤになってしまった。

次いで第一革命か第二革命かについて討議が行はれた。

佐野学君は日本の特殊国を主張した。

堺さんは特別委員会に付託して拡大委員会において決定したいと意見をだしたが，高津君から大会を度々開くのは避くべきで本店から指令もあるし，代表の報告もあり，運動の方向も定まるから，この大会で決定すべきである，と主張し討議することになった。

堺君から国内情勢と階級勢力について説明の後討論に移った。

今その討論の内容を詳しく憶へていない。浦田，高津，高瀬君などについて調べてほしい。

この後合法政党問題が討議されたが近藤君は議会政策には反対である。政治教育の学校として合法政党組織に賛成すると主張し，渡政君は普選の際には合法政党を必要とする。議会は利用せねばならぬ。秘密結社のみでは駄目だ。時期は急速になさるべきだと主張した。

六月の検挙までは党が拡大していったことのほか語ることもない。

検挙後獄中で大震災に逢って我々が全部一緒になった時，野坂氏がこの公判を機会に法廷で堂々と党の政策を宣伝すべきであることを主張したが，併し全体的に否認の気分が強く法廷闘争は否定された。

裁判の時には荒畑君が自分は共産党員である。三人居れば必ず活動をやると主張した。

党結成当時出版労働者はアナ系の正進，信友などを通じて大杉に指導されていたので，我々は博文館を中心に出版従業員組合を組織し戦線統一運動をやった。日本におけるアナルコ・サンジカリズムが一番影響していたのはこの出版労働者であった。

日本のアナルコ・サンジカリズムは政治運動では無政府主義，労働運動では協調主義であった。

### 史料２　浦田武雄からの聞き取り

党創立時代の想ひ出 一九四八，七，三〇日[(2)]

浦田武雄口授

一，日本社会主義同盟

党創立の前に二つの運動があった。一は社会主義同盟で，二は所謂暁民共産党事件であった。ロシアの十月革命の影響それに引続く世界革命の昂揚は，日本の古い社会主義者に新しい活気を与へ，その影響は更に若い革命的インテリを大量的に生みだした。

社会主義研究は盛んになって，山崎今朝弥老のところから山川が主筆で月刊雑誌『社会

(2)　原文：200 字詰め原稿用紙 34 枚。

主義研究』が発行され，夏季講習会が開かれた。講師は堺の日本社会主義史，西川の日本労働運動史，山川の労働運動の社会的価値，大杉の社会改造の哲学，高畠のマルクス主義総批評などを始め室伏，生田，馬場，大庭などを講師として闘士養成とともに社会主義者の結合が進められた。

この頃大杉は近藤憲二らと東京労働運動同盟会を組織し信友，正進の会員を指導してアナルコ・サンジカリズムを宣伝していた。

山川は堺，荒畑らと労働組合研究会を組織し労働組合運動の闘士養成と宣伝をしていた。

高畠らは国家社会主義運動へ転向して暴力的社会フワショの横道にはひりこんでいた。

この社会主義者らの対立を統一し大同団結させるため，橋浦，服部，山崎らの諸君が，堺，山川，大杉，高畠らの巨頭達を説いて社会主義同盟を組織すること，その発起人たることを承諾させた。発起人中には総同盟，友愛会，信友会，正進会，交通労働組合，時計工組合，鉱夫総同盟等の労働団体，建設者同盟，扶信会等の学生団体，新人会，暁民会等の思想団体に属する人々から，従来の各社会主義者を網羅していた。

これが一九二〇年十二月創立大会を開いて社会主義同盟として結成され，機関紙『社会主義』を発行した。

創立大会の翌日創立報告演説会が開かれたが，直に中止解散の弾圧のため会場は騒擾化して河合，渡満その他十数名が投獄された。

同盟は労働組合有志の支持と参加によって非常に発展した。各地で開いた演説会は常に満員であった。同盟員は三千名を超へた。

同盟は社会主義研究の発展が社会主義運動と労働運動の昂揚と結びついたものであった。

しかしその組織は共産主義者も，無政府主義者も，ブルジョア自由主義者までが含まれていたのでストライキその他の実践活動に於て事毎に対立，衝突を生じた。加うるに労働運動の社会主義運動と結合しての異常な発展に恐怖して，天皇制政府は解散命令を下した。これによって実際上にも解体したのは二十一年の六月頃であった。

二，暁民会事件

暁民会事件は，あれは真の共産党ではない。暁民会には河合義虎君，川崎悦行君らの優秀な同志や高津君，高瀬君らの堅実な人がいたが，これにアメリカ帰りの近藤栄蔵君が結びついて一九二一年末，関東大演習の際，東京市内に散宿した兵士に対し宣伝ビラを散布したのを検挙されたのをデッチ上げられたのだ。近藤はその頃大杉の労働運動社にいた。一体アメリカ帰りの主義者はほとんど冒険主義者で堅実味をかいていた。この頃労働運動社内で，ロシアの社会主義革命とプロレタリア独裁に対する是非論から所謂アナとボルとに対立して，近藤，高津の両君はアナキストと別れ労働運動社をやめた。近藤は中国の同志と連絡して示唆をうけ，独立に運動をやろうとして売文社を起した。そして二十一年末宣伝ポスター〔1字空白〕万枚を貼付し，「軍人諸君に訴ふ」といふビラを二千枚軍隊の宿舎へ発送したのであった。

当時新しい革命的労働者としては南葛の河井義虎君や相馬，丹野君で南葛は近代的左翼労働運動の発祥地ともいへる。新しい革命

的インテリとしては徳田君，井之口君，それに私も加はっていたが，最初であった。井之口君と学校関係から小林武二郎氏が経済的援助をしてくれたシンパであった。第二回大会の一直園も同氏が便宜を計ってくれたのだ。

この頃はアナとボルとの闘争が盛んで，労働組合の指導権をめぐって争そった。アナはストライキや実践運動に於て実際と適合せず失敗が多かったので漸次信頼を失って，理論的に優れたアナルコ・サンジカリストはほとんどボリシェビーキといはれていた共産主義陣営に移ってきた。

なお，河合，川崎と国領伍一郎君は最も嘱望されていた優秀な同志で三羽烏といはれていた。渡辺政之助はその頃まだ政治ずきな町の世話役であったのを河合義虎が引出したのであった。

三，創立大会

創立大会が開かれたのは二十二年七月十五日頃で麻布霞町付近の某君の宅であった。

出席者は各グループの代表者で約十四・五名位であったと記憶する。水曜会から西雅雄，上田茂樹，徳田球一，ML 会から堺，仲曽根，暁民会から高津，近藤，高瀬，浦田，LL 会から荒畑，北郊ソビエートから橋浦，時計工から渡辺満三，関東機械工から杉浦らで山川は創立大会には出席しなかった。

第一回大会の議案は極東民族大会から帰国した徳田君と高瀬君の大会の模様と，共産青年運動とその組織化について報告があり，「党規」が討議の後決定された。「党規」の内容について詳しい記憶がないがそれは四十八ヶ条から成り特に規律について厳重な取扱が規定されていた。

その頃の共産主義グループは，水曜会，ML 会，暁民会，北郊ソビエート（時計工），LL 会，木曜会等で，新人会の内には多数の共産主義者が居り，赤松，志賀，黒田君達がいた。

この大会で執行委員五名が選ばれた。委員長荒畑，堺，山川，橋浦，高津らの各グループの主脳者であった。

執行部のもとに青年部，印刷翻訳部，宣伝部，外務部，調査部，審判部，会計部の専門部があった。私は宣伝部と審判部の委員になった。

四，第二回大会

第二回大会は翌年の二月四日頃千葉県市川で開かれた。大会というても執行委員と各細胞代表者とによって構成されていた。

大会出席者は創立大会よりも二倍ぐらい多く，また出席者は夫々の細胞を代表していた。

執行委員長荒畑，堺，高津，橋浦，細胞代表浦田，田所，佐野，渡満，高瀬，吉川，上田，徳田，仲曽根，鍋山ら十七・八名であった。(3)

大会の主な議案は「党規」改正と役員改選であった。

「党規」の改正は，党員の数も細胞も増加したことと，党組織も整備してきたので，細胞の組織，党員の資格，規律，執行委員会の組

(3)　原文では，「高瀬」と「吉川」の間に，一度「佐野」と書かれて削除してあり，「仲曽根」と「鍋山」の間に，一度「川内，小岩井」と書かれて削除してある。削除された人数を入れないと「一七・八名」にはならない。

織と職能等についての改正であった。

第二に党は各グループが集合して結党されたため各グループ間の対立抗争が起り，主として水曜会を代表とする荒畑，暁民会を代表する高津の間に対立があった。そこでこの分派争いを克服するため執行委員を堺一人を残し，セクト的傾向の強い人を排除して全部改選し十名とした。

執行委員長堺，吉川，佐野，浦田，上田，渡政，杉浦，仲曽根，小岩井，辻井の十名とし外に高津正道が政治委員となった。

細胞代表委員として猪股，田所，近藤，荒畑，高津，渡政，市義，辻井，川内，高野，佐野，山懸等であったと思ふ。

この頃の細胞は街頭細胞といわれる居住組織で各その居住名を細胞名としていた。

細胞会議は週一回確実に開かれ情勢報告や研究会などがもたれた。

細胞は五・六名を限度としてそれ以上は細胞分裂をして二つに分れた。

会費は正確に五十銭から一円位まで納められていた。

この大会でコミンテルン第四回大会出席代表者高瀬からコミンテルン加盟が承認され日本支部と正式になったことが報告され確認された。

ブハリンの「日本共産党綱領草案」が発表されたが，これは，改めて日本の現状と睨み合せて起草することになり佐野学と猪股が起草委員となった。

組織方針と運動方針，主として労働組合対策が議題となって決定されたが，今その内容を記憶していない。何か紙上でもその当時発表したと憶へている。

山川は各会合へは一度も出席せず文書，又は西君を通じて意見を提出していた。

なほ前年八月『前衛』誌上に発表した論文「無産階級運動の方向転換」は山川個人の論文で，コミンテルン第三回大会の大衆の中へのスローガンを事情の異る日本に当はめ日和見主義的な解釈をつけて，解党主義的なものになったものと思います。

五，臨時大会

先ず重要な点を先に述べて，それから一般的な運動のことを話すことにしよう。

臨時大会の開かれたのは石神井の豊島園で三月の十五日頃であったろう。大会の主要問題は，コミンテルン派遣代表の決定と，その報告を纏め，第四回大会で与へられた「綱領草案」の決定とのためであった。

コミンテルン派遣代表は荒畑に決定した。

出席者は堺，佐野，吉川，浦田，上田，渡政，杉浦，仲曽根，小岩井，辻井の各執行委員と田所，渡満，野坂，西，荒畑，市義，川内，高野，山懸，金子等，細胞代表と三十名位であったと記憶する。(4)

綱領の問題では先ず天皇制が問題となった。天皇制について最も活発に討論したのは猪股であった。彼は天皇制の問題をハッキリさせなければ綱領は決定しないと主張した。しか

(4)　原文では，「田所」以下の人名を列挙した部分の上部の余白に，「近藤，鍋山，猪股，高瀬」と書かれている。

し廃止に賛成かどうかは明言しなかった。[5]

これに対し堺は鋭く反対した。この問題をここで論議すれば直に検挙されるから討議することは危険である。もし強いて討議するなら自分は退場すると強硬に主張したため天皇制の問題は遂に討議されなかった。[6]

佐野は自己の意見を持たなかった。彼は単に学問的で非実際的で政治的に意識も低かった。佐野が予審で山懸と私は石神井大会で天皇制の問題は論じない方がよいというたとのことだが，そんなことはいわなかったネ。

次に第一革命か第二革命か，つまりブルジョア民主革命かプロレタリア革命かの問題が討議された。

この主な討論は，

佐野，日本は特殊国である。党員中には日本の事情をよく認識しないものがある。ブルジョア民主革命がなくてはプロレタリア革命がないとはいへない。我々の努力と手腕によってプロ革命が直接に行はれる可能性がある。

渡政，ブル民主革命からプロ革命に移行するには大きな困難が伴ふ。日本の情勢は伊太利に類似するから重要な勢力で対抗すべきだ。

小岩井，山懸は，民主革命に重点をおくことに反対した。

杉浦，浦田は民主革命を目標とすることを主張した。

その他吉川，野坂も過渡的に民主革命を主張した。

その他高津，荒畑，西，市義君らも討論したが遂に決定に到らず審議未了に終った。

次に合法的政党組織の件について討論された。先ず高津から説明があった。

コミンテルンからの指令であるが労組総連合が決裂したのは準備不足のためであるから充分に準備したい。労働組合，農民組合，水平社等の幹部や朝鮮台湾の同志も含むべきだ。執行委員会の意見は次のように決定した。

一，合法的政党を組織する。

——（一名反対）——

一，議会をボイコットせず利用する。

一，労働者農民を構成要素とする。

近藤，組織は必要だが議会政策には反対だ。政党は大衆の政治教育の学校だ。

渡政，秘密結社だけでは駄目だ。普選後は合法政党が必要だ。議会は利用すべきだ。代議士を厳選し，労働組合の幹部としてはならぬ。等と討論が行はれたが，討論が終結せず四月の拡大委員会で決定することにして閉会になったと思ふ。

六，党の活動

創立以来の党の活動としては，

一，対露非干渉同志会を通じての

イ，シベリヤ出兵反対，即時撤兵運動

ロ，対露通商の即時開始

ハ，ロシア飢饉救済運動

二，三悪法案反対運動

三，赤色労働組合運動

---

(5)　原文では，この猪俣の発言を紹介した部分の左方の余白に，「表現につい」と書かれている。

(6)　原文では，この堺の発言を紹介した部分の上部の余白に，「無用の犠牲」と書かれており，その左方に「野坂の仲裁案　皆が理解しているから」と書かれている。

四，学生聯合会運動の指導
五，全国無産者同盟の組織
六，失業者反対運動
七，日本農民組合運動の左翼化
八，労働組合戦線統一運動等であったと思ふ。

これらの詳しいことは君の方（酒井）がよく知っているだろうから何れ又思ひだして話すことにしよう。

党活動の最も重点を置いていたのは，第一に労働者農民の間に宣伝して組織を拡大すること。第二は労働組合，農民運動の対策を確立すること。第三に党の綱領を決定して，戦略戦術を決定し政策を立てることであった。

党の組織もダンダン拡大していった。神戸，名古屋等にも細胞ができた。六月検挙の時分の党員実数は百名を超へていたと思はれる。

党の活動は直接でなく労働組合や農民組合その他の大衆団体内の党員を通じて行はれた。それで一般組合員は党の存在を知らず，個人関係によって結ばれていた。そのためある団体内の党員の移動によってその団体と党とが関係が絶へることもあった。

このようにして党自体は活動しなかったが，組合活動や農民運動，文化団体等の活動は活発に行はれた。これは全くそれらの団体内の党員の活動によるもので労働組合も農民組合も目立って左翼化していった。

私は農民運動の責任者で私の入獄中は稲村隆一君が引続いて指導していた。

『農民運動』は党の宣伝機関紙で一九二二年九月に第一号を発行した。タブロイド判八頁位で橋浦泰雄君なども時に漫画を書いてくれた。農民運動の宣伝とその拡大発展には大きな力となったと思ふ。

当時の農民運動の活動家には，稲村隆一，森崎源吉，荘原達，浅沼稲次郎，赤松克麿も農民部員で，西雅雄君らであった。

六月五日の検挙は，その前五月の十日頃早大内の軍事研究団と文化同盟との衝突の際佐野学の研究室が捜査され，また佐野が不注意にも党の重要記録をスパイ的な元鉱夫総連合の渋谷といふ男に預けたため，五月二十四・五日頃警視庁に押収されたことが判ったので遠からず検挙があるだろうと予想された。

そこでその対策のため五月の月末頃緊急執行委員会を開いた。出席者は堺，仲曽(ママ)根，上田，渡満，杉浦，浦田ら六名位が集まった。決定された事は，

一，逃げたり隠れたりしないこと。
二，関係書類を整理すること。
三，佐野学は経験も乏しく性格が弱くて危険だから亡命させること。などであった。高津，近藤，山懸，辻井らは勝手に亡命したのだ。尤もなかには連絡のとれない人もあったかも知れぬ。

赤松，北原，佐文，河(ママ)合，山川らによって代行新中央委員会ができたといふことだが，この席上では決定していない。それは多分堺によって組織されたものではないだろうか。赤松や北原らは何等積極的に党活動をしなかった。

大震災の時は徳田君が先頭に立って全収容者を集め演説をやった。そして収容者の中から代表者を選んで党員をのぞく一般収容者の即時釈放を所長に要求した。翌日の后四時に裁判所から回答されることになっていたので待っていると，回答時間に武装軍隊が銃剣で

看守が抜剣で私達の避難していた二舎と三舎の芝生の上を取巻いて一人一人手錠をかけ，社会主義者と一般者を分離し舎房の廊下に入れた。社会主義者は軍隊に移すというていたがこれは行はなかった。

特別に軍隊が警備していたが，看守らはのぼせ上がって抜剣したり，軍隊は銃剣をつきつけて威脅した。私は野坂君と隣房にいたが，ゴリキーの牢獄の歌を唱ひながら，何時殺されるかも知れないと思って覚悟をしていた。

川崎悦行は病舎にいて危篤だといふので私がいって看病したが，身体がムクンでいたが元気であった。しかし私が帰ると，その翌日死んだといふ知らせをうけた。彼は理論的にも実際的にも非常に優れた同志であったが惜しいことをした。彼の死んだのは十一月十四日であったと思ふ。

渡政は大そう親孝行の人で獄中でも母親のことを心配していた。

解党問題については私は一番遅く二月の末に出てきて病気のため郷里熊本へ帰ったので何も知らなかった。熊本で私は五高の後藤寿男やその他の諸君を知った。この頃鹿児島に井之口政雄君がいて七高の人達を指導していた。これらの人達が東大や京大で志賀君らの次期の運動を指導することになった。

大正十四年の二月から四月に亙って四・五回裁判が開かれた。この裁判で対立が現れた。一は堺，山川らの解党派で，現在日本では非合法運動は不可能だから，党は労働者が成長してその条件が備ってから組織すべきだ，それまでは大衆の中へもぐりこんでしまうといふのであった。二は徳田，渡政らの党の公然化とその独自的活動の主張であった。

史料３　高瀬清からの聞き取り

一九四八，八，一一，高瀬清氏談(7)

日本共産党創立前後の想い出

日本共産党創立の最初の緒となったのは，一九二十年十月頃上海でコミンテルンの指導の下で極東の社会主義者会議が開かれた時，初め堺，山川らが出席を交渉されたが国外連絡を怖れて応じなかったので，大杉が出席しコミンテルン極東部長ウォイチンスキーから，日本における共産主義運動について説得されたが，彼はアナキズムの自説を主張して，ボル系としては堺，山川らの居ることを紹介し，結局日本における労働運動のアジプロのため共産主義者と協同して新聞を発行することになった。

大杉が上海から帰ると『週刊労働運動』を発行することになり，アナ系から和田久，近憲ら，ボル系から高津，近栄の両君が入社した。高津，近栄両君の入社は『労働運動』を共産主義者によって指導していくためで，鈴木，棚橋らの改良主義者と闘争するとともに，アナ系とも内部に於いて，自由か，独裁かといふような論争が大いに闘はされた。

当時十月革命の影響は非常に大きく，プロレタリア独裁政治の是非から，ボル系とアナ系の間には激しい論争が交はされていた。

社会主義同盟が官憲の解散命令に一遍に潰

(7)　原文：200 字詰め原稿用紙 20 枚。

れてしまったのも内部における二派の闘争のためであった。

二十一年の五月近藤栄蔵は上海の委員会と連絡のため労働運動社から行った。

この時彼は出発の前に「日本脱出記」なるものを書いていることは事実だ。しかしその帰途下関で捕まったのは，言葉の通じない外人の通訳をしてやったため一番最後になり，上海から受取ってきた金を発見されて警視庁に送られて一月位拘留された。その金は没収する法律はないといふので山崎今朝弥弁護士が取戻し，それは多分『前衛』発行の資金になっていると思ふ。

暁民共産党は官憲のつけた名前であったが，しかし暁民会は当時最も革命的なボルシェビーキ的なグループであった。そして党組織準備委員会の各グループの中の党組織活動に最も積極的に働いていた。二十一年の暮東京市内に大演習の軍隊が宿泊した時宣伝ビラを撒いたり小さい伝単を貼った。これが端緒になって暁民会内の主要メンバーが検挙され約十名が投獄された。

二十一年十二月，イルクーツクでワシントン会議に対抗して，極東民族大会が開かれる予定であったが準備の都合で二十二年の一月モスコウで開催された。この大会には徳田君と僕と外五・六名のアナキスト的労働者が出席した。ボルシェビーキ的労働者を撰ぶつもりであったが適当な労働者がいなかったので，止むを得ずアナキストの中から選んだのであった。徳田君は先に一人で出発したので，僕一人この放縦なアナキスト数名を連れていくのに苦労した。

この極東民族大会の後，コミンテルンから共同戦線についての指令があった。私が帰国したのは五・六月頃であった。それで渋谷の天現寺と恵比寿の中程を右に登った坂の上の或る産婆さんの二階を借りて隠れていた。この家は下に交番を見下ろす所にあって反って安全と思った。

創立大会となった第一回会合はこの家で開かれたのだ。多分七月中旬頃であったと思う。出席者は山川，堺，橋浦，高津，近藤，高瀬，西君らであったと記憶する。荒畑や徳田君は出席していなかったと思ふ。

議題は僕から極東民族大会の報告と，共同戦線の指令——内容は支配階級の攻撃に対し，革命的無政府主義者，サンジカリストをも含めて党を組織せよ。といふようなものであったと記憶する。——を伝へ，暫定規約の審議決定，党結成報告のためコミンテルン第四回世界大会への出席代表の選出等であった。「党紀」はコミンテルンの規約を基礎に四十八ヶ条から成るものが採択され，派遣代表は高瀬と決定した。

徳田君がこの創立大会に出席していないのは，同君が独断専行のことがあって出席していなかったと思ふ。

九月の初め頃僕は川内唯彦君とともにコミンテルン第四回世界大会へ，日本共産党の成立を報告し，コミンテルンへ正式加盟手続のため入露した。大会に於ける報告は同志片山が僕の報告を基礎としてやられた。それは党の組織と暫定規約及び委員氏名等であった。

大会の直後日本問題委員会が開かれ，ブハーリン，李大釗，片山等が出席した。ここで問

題となったのは，(1) 高尾平兵衛の党紀違反。(2) 綱領。(3) 規約。(4) 組織方針。(5) 運動方針等に関する諸問題であった。

(1) の高尾の問題は彼が先年上海へ派遣された時の党資金に関する問題で，党紀を厳格になすべきこと，党関係と個人関係を明白にすべきことが強調された。

(2) 綱領の問題については，同志片山が天皇制の廃止を最も強硬に主張した。彼はアメリカにいた関係からでなく，心から天皇制に対して憎悪をもっていたようであった。そして討論の成果をまとめてブハーリンによって「日本共産党綱領草案」が起草され，これは後に僕が持帰って臨時大会の討論の原本になったものだ。

(3) 規約は暫定規約を基に改正されたものであった。

(4) 組織方針は主として予算の問題と党勢力の拡大についてであった。

(5) 運動方針は労働組合対策と労働組合の組織に関してであった。

更に共産主義青年同盟の組織についての指令があった。

尚予算の問題といふのは年額必要額を提示しろとのことで八千円を要求したところ，四千円に切下げられたので強硬に主張して六千円に決まった。高尾の問題にからんで，日本の同志が金の使途について不明瞭であることが指摘され厳密になすべきことが指示された。

第二回大会は一九二三年二月千葉県市川で開かれた。出席者は堺，高津，橋浦，荒畑，田所，浦田，近藤，渡満，高瀬，徳田，西，仲曽根，鍋山，辻井，上田，吉川，川崎君らであったと記憶する。佐野学は出席しなかったと思ふ。

この大会での問題は (1) 党機関の整備，(2) 党組織問題，(3) 規律，(4)「党規」の決定等であった。党規約は「英国共産党暫定党規」と称されて五十ヶ条位からなるものであった。

党内における分派的対立が激しかったので，旧委員は堺一名を残して全部，分派的色合のない人が撰出された。

委員は十名に増員され細胞代表委員も二倍以上に増加した。

新しい執行委員は，堺，吉川，佐野，浦田，上田，渡政，杉浦，仲曽根，小岩井，辻井君らであったと思ふ。その他十四・五名の細胞代表者が選出された。

この第二回大会以後党は相当大きくなった。党員数も百名位になっていたようだ。

この頃，コミンテルンから党綱領を決定し，組織を確立すべきことの指令があったので，その他の問題を決定するため三月中旬頃，石神井の某旅館で臨時大会が開かれた。大会は運送店の懇親会だと公称して行はれた。

大会出席者は堺，佐野，猪股，高津，近藤，田所，浦田，渡満，渡政，杉浦，上田，吉川，野坂，西，仲曽根，鍋山，荒畑，市川，辻井，高野，山本，小岩井，高瀬等三十名近くであった。

問題は，

(一)「綱領草案」審議

(二) コミンテルン代表派遣

(三) 合法政党組織について

綱領審議に於いて最も討議されたのは天皇制の問題についてであった。

天皇制廃止については全員異議なしであっ

たが，その表現について異論があった。

堺，佐野らは今此処で天皇制の問題にふれれば幸徳事件のように首が落ちる。うっかり論議はできないと主張した。そしてその表現を如何に出すかについてやったが結論は出なかった。

この臨時大会に於いて僕が書記を勤めた。この議事録は佐野学君が保管していたようだが，早稲田の反軍事教練闘争から佐野君の研究室が捜査されたので危険を感じて，元坑夫総同盟の組合員に預けたのが押収され，これが六月検挙の手引となったようだ。

後に僕の予審調べの時，沼予審判事がこの記録をつきつけて僕が書いたのだろうといふて攻めたが，僕はどこまでも偽物だというて頑張った。原文は縦書であったので，僕が書いたのは横書だというて頑張った。

当時はまだ幸徳事件の記憶が残っていて，この大会の天皇制論議がバレルと幸徳事件の二の舞をやられると一般に考へられていた。そこで責任感から頑張ったのであった。

六月検挙の模様は判明していることと思ふが，検挙当時の党は相当拡大して百五・六十名であったと思ふ。もし六月検挙がなかったら党は大きく伸びていただろう。

検挙当時は全員が幸徳事件を連想したようで，吉川守圀は運動場でいつも首を手で叩いてみせた。最初何のことだか判らなかったが段々判ってきた。

震災の時，皆一緒になった時，堺がこの記録のことを尋ねたので，横書であるから裁判所のものは偽物であるというてやったら，後に俺までだましたなと憤慨していた。

地震の打撃をうけて獄中で解党論が生れた。これは獄外の赤松，青野らの解党論に呼応したものであった。このとき解党に反対したのは僕一人であった。これは後にコミンテルンに通知され「梅田」という名で記録されている。古い連中，荒畑，徳田君らも解党に賛成していた。

### 史料４　高津正道からの聞き取り

高津正道氏の創立時代談[8]

――一九四八年九月――

大正九年の夏頃，金鑽（サン）[9]といふ朝鮮の同志がコミンテルンと連絡をつけるため，山川氏のところへきた。山川氏は国外との連絡について全く不安を感じ，また連絡に来た朝鮮の金氏にも信頼がもてず，更に国外から運動資金を手にいれることは重大な問題である，といふので堺氏のところを教へてやった。

堺氏も同様な考へで，大杉栄を紹介した。

大杉は逢って直に賛成し，その年の九月上海に行き，コミンテルンの代表らと逢って，運動資金を貰って帰った。

大杉は上海から帰国すると，堺の所へボルの運動をやるから人を貸してくれと申込んできた。そこで高津と近藤栄蔵が参加すること

(8)　原文：200 字詰め原稿用紙 5 枚。

(9)　「サン」という振り仮名は原文にある。なお，原文では，「鑽」の字の「つくり」の上部は「夫」2 つでなく「先」2 つであるが，略体である「夫」2 つで表記した。また，原文では，その「つくり」の下部は「貝」ではなく「隹」であるが，通常の字体である，「貝」で表記した。

になった。間もなく駿河台に事務所をもって翌年一月から『週刊労働運動』を発刊した。

労働運動社は大杉，近藤憲次(ママ)，和田久らのアナキストと近藤と私のボルシェビーキの共同戦線であったが，無政府主義的色彩が濃く，毎号「革命は大陸からくる」と明日にでも革命がくるように書いた。

鈴木文治らの改良主義的指導者とも社会主義の立場から闘争した。

しかし，この頃は社会主義同盟内のアナとボルの対立もあって，社内においても意見の対立があった。

そこでどうしても純粋な党を組織せねばならぬといふことに意見が一致した。

はじめ堺，山川，荒畑の大先輩の間で話合があり，それから橋浦君と私に話があった。

党組織の相談が五人の会合の席上で提案された。そこで党を組織したことにして，五月頃近藤栄蔵を上海に派遣した。

近藤は上海でコミンテルン代表に逢ひ運動資金六千余円をうけとって帰国した。

彼は下関へ上陸すると，あるお茶屋へ上って豪遊したため，怪しまれて拘留され，金をとられて東京へ送られて帰った。

この金はその後山崎弁護士の手で警視庁から取下げているとおぼへている。

『労働運動』はこんな事情で，六月頃廃刊になってしまった。

この頃社会主義同盟も解散して，アナとボルとの提携は全く破れ，抗争するようになった。

（経済学部教授）